

葬儀や法事は 何のために するのですか。



話や、ご近所の方々が故人を覚えてくれていることへのうれしさも聞かえてきます。

現在は葬儀社によるサービスも多岐にわたり、さまざまな形での葬儀を選ぶこともできます。そつしたことも含めて、さきほどの会話にはたくさんのお話が続きます。ご自身のごきょうだいがなくなり、家族葬の後に知らされ、大変に悲しまれたこと。会葬者が自分の予想を超えて多く、大勢の方ともに見送ることができてうれしかったことなど、いろいろな経験を聞かせていただくことで、故人の死を悼み、そのご遺徳を偲んでいきたいのはご遺族、ご親族だけではないことにも、お互い気づかせ



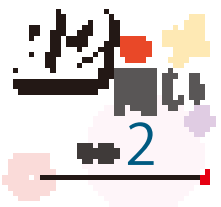
もりともたか
森 智崇
研修講師

さまざまな形の葬儀

ご法事するとき、故人の晩年のご様子や私の知らなかったお人柄を教えていただくことがあります。また、ご門徒さんの中には、ご自宅での看取りと葬儀を経験された方も多く、当時のお話をお聞かせいただくこともあります。

「おばあちゃんにお庭が見えるように縁側近くに布団を敷いて、最後まで数年ほど介護をしました」「〇〇さんの葬儀の時は大雪が降って大変でした。みんなで寒いね、と言ってねえ」

当時を振り返っての会話には、それぞれ別れの悲しみを思い返したり、故人との楽しい思い出



れます。

厚生労働省の平成28年の人口動態統計によれば、日本人の間死亡者数は137万7748人です。関西学院大学人間福祉学人間科学科教授の坂口幸弘さんは著書『死別の悲しみに向き合う』の中で次のような計算をされます。「一人の死亡者につき、仮に親しい人が平均して五人いたとすれば延べ約六百五十万人以上もの人が一年のうちに死別を経験する計算になる。言い換えれば日本人の約四人に一人は、過去五年のうちに、親し

い人を亡くした経験があるともいえる。中高年世代以上の方であれば、まわりの友人や知人を見渡してみると、この数年の間に死別を経験したという人が、少なくとも一人や二人はいるのではないだろうか」

このように見ると、ご自身に死別の経験はなくても、身近には死別による悲嘆を経験されている方が多くおられるのです。

しかし一方で、世帯の縮小や地域、近隣とのつながりが減っていることもあり、日頃から死別の悲嘆を語り合える機会はますます

ます失われ、悲しみを一人で抱えている人は増えているのではないのでしょうか。

阿弥陀さまの願いを通して

「あらゆる悲しみは、それを物語にするか、それについて物語を語ることで、耐えられるものになる」(ハンナ・アーレント「ドイツ哲学者」という言葉があります。

娘が幼稚園生の頃です。いつも一緒に通園するA君のお父さんが急死されました。お互いの連れ合い同士も友人であり、娘

と連れ合いと私の三人で葬儀へ

参列しました。葬儀場まで、A君の悲しみや気持ちを想像すると胸が詰まり、A君へどのような接していいのか悩んでいました。私は娘たちにと以前から用意していた子ども用のお念珠を、A君と、A君の弟へ「一緒に参りさせてね」と手渡しました。その当時それが私にできる精いっぱいのことでした。

おつとめのとき、娘の声が聞こえてきました。自分のイスをわざわざ娘の隣に持ってきて、娘にあわせて一緒に聖典を読んでいるA君の声も聞こえます。導師によるご法話中、A君と娘の会話が大きく響きました。「お父さん、冷たくなってた」

「そうなん…」

「救急車で運ばれたんよ」

「そうなん…」

「お父さんねえ…」

「そうなん…」

大人たちの涙の音が葬儀場に広がりながらも、二人の会話はずっと続いていたことを思い出します。

阿弥陀さまの願いは、死別の悲嘆、苦しみを語る私たちのうえに、「どんな小さな涙の声も見逃すことはなく、どんなあなたも引き受けた」と、つねに私たちへ南無阿弥陀仏とはたらかれています。

葬儀や法事などの仏事を通じて、阿弥陀さまの願いを何度も聞かせていただくことで、安心

して故人を偲び、お互いのこれまでの思い、物語を語りあい聞きあうことができるのです。阿弥陀さまの願いを通して、あらためて故人の思いに気づかされ紡ぎ直していくこともできるのです。それは、私のいのちそのものを振り返って歩んでいける、とても大切な日常ではないでしょうか。

今回の問いは、そうした語れる場を失くした寂しさ、悔しさから発せられたものと受け止めれば、葬儀、法事にご縁をいただく僧侶も、一方的に語る教化者意識や、形骸化した対応に終始していなかっただかと考えさせられます。ご縁あるごとに、一緒に聞きあいいただけますね。